



ファミリーホーム通信

第19回ファミリーホーム 全国研究大会 i n 長崎 特集

ファミリーホーム通信 2025年11月
日本ファミリーホーム協議会

もくじ

北川会長 挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
行政説明 内閣府こども家庭庁支援局家庭福祉課 課長補佐 胡内敦司氏・・・・・・	3
基調講演「子どもたちの笑顔のために ～つながり、つなげる～」 社会的養育総合支援センター センター長 堀 浄信氏・・・・・・	8
写真で見る大会の様子・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
こどもまんなか委員会 REPORT・・・・・・・・・・・・・・・・・・	14
第1分科会 『ファミリーホームに期待されること』 ～関係機関との連携～・・・・・・	15
第2分科会 『ファミリーホームのこれからの役割』・・・・・・	18
第3分科会 『子どもたちの支援について』 ～子ども達が大切にされていると感じる支援について～・・・・・・	22
閉会式・・・・・・・・・・・・・・・・・・	26

北川聡子会長 開会挨拶

日本ファミリーホーム協議会会長の北川でございます。第19回日本ファミリーホーム協議会全国研究大会が長崎ハウステンボスの地で全国各地から多くのファミリーホームの方々、関係者のみなさま、こどもたちが集まって開催の運びとなりましたことを厚く御礼申し上げます。開催にあたりまして、来賓の多くの方々が出席いただきましたことを本当に感謝いたします。主催者を代表して一言ご挨拶申し上げます。



ファミリーホームは何らかの家庭の事情があって、家庭で暮らせないこどもたちを自分の家庭に招き入れて一緒に暮らす家庭養護の場です。ファミリーホームは全国で少しずつ増えてきており、490か所ぐらいになってきています。2,000人近いこどもたちがファミリーホームで暮らしています。全国各地のファミリーホームは、家庭養育として、養育者と補助者で毎日こどもたちの豊かな育ちのために、こどもたちが背負っている苦労も一緒に背負って、毎日24時間365日、大変な努力でこどもたちを育てています。まず、全国から集まっていたいただいたファミリーホームのみなさま、ここに集まれないけれど一生懸命こどもたちを養育している方々に感謝申し上げます。ありがとうございます。

ファミリーホームはこどもの最善の利益を柱に家庭養護として、できるだけ人としての土台につながる愛着形成がなされ、安心感を持った大人に成長することを目標とした社会的な使命を持っています。昨年度からファミリーホームに個別対応職員加算が付きまして、こどもたちにより手厚い養育や運営が可能になりました。こども家庭庁の方々に感謝申し上げます。ありがとうございます。私たちファミリーホーム協議会は、こども家庭庁からの応援に感謝するからこそ、こどもたちにできるだけ良い育ちを、ウェルビーイングのために行動したいと考えました。

具体的には、赤ちゃんの時代にしっかりと気持ちが受け止められて、抱っこされて育つように、3人の赤ちゃんのためのファミリーホームを日本財団の助成のもと、モデルとしてスタートしました。命がこどもたちが受け止められて、すくすくと育っていくこと、そのために協議会としても努力をしていきたいと思っています。まだ沖縄と北海道の2ファミリーホームですけれども、これからどんどん赤ちゃんのためのファミリーホームをやりたい方々を募集して増やしていきたいと思っています。

そしてこれまでも、ファミリーホームにはいろんなニーズを持ったこどもが居ますが、一人ひとりが大切な命です。この命が家庭で十分に受け止められ、自己肯定感が育まれ、自分と他者をも大切にでき、人とつながれる大人に成長できるよう家庭養育、暖かいファミリーホームをこれまで以上に推進していくために全国のみなさんと一緒に協議会も頑張っていきたいと思っております。みなさんにつながるということで、今大会は「つなぐ、つなげる、つながる」をテーマに、サブテーマは「ファミリーホームのこれから」です。現状に甘んじていると進歩せず、良くない方向に行くこともよく言われているので、これからのファミリーホームをしっかりとみなさんと一緒に考えていきたいと思えます。すべてのプログラムは、こどもを真ん中に、ウェルビーイングを求めたこれからの家庭養護であるファミリーホームのあり方を大会を通じてみなさんと一緒に考えていきたいと思えます。そして、こどもたちもたくさんいらしています。熱中症に気を付けながらハウステンボスを満喫し、一緒に楽しんでいただければと思います。

最後になりますが、本大会の開催にご尽力いただきました、九州ブロックのみなさん、児童家庭支援センター聖華園絆の荒木先生、感謝申し上げます。そして、全国から集まったみなさん、こどもたちが実りある2日間となるように記念して開会の挨拶とさせていただきます。みなさん、どうぞ2日間よろしくお願いいたします。

行政説明

こども家庭庁 家庭福祉課 課長補佐 胡内敦司氏

急激な人口減少社会

- ・出生数と合計特殊出生率

2024年の出生数は、68万6,061人
(9年連続減少)

合計特殊出生率は、1.15 (9年連続減少)
と過去最低を更新している。

少子化高齢化、人口減少社会となっている。

2024年、約92万人の人口が減っており、香川県の人口規模で人が減っている。減少スピードが上がっている。

こどもの数が減る → 若者が減る、社会に出て行く大人が減る → 目の前のこどもを支えるために、一つの部署だけではなく、社会全体で支えていく必要がある。



児童相談所の虐待相談対応件数

- ・令和5年度の相談件数は、225,509件。

→ 出生数は減っているが、相談件数は増え続けており、反比例している。

なぜこのようになっているのか？

それがファミリーホームのこれからを考えていくうえで重要。

- ・虐待を受けたこどもの年齢構成

令和5年度、0歳～3歳：39,501件（17.5%）

3歳～学齢前児童：55,545件（24.6%）

低年齢児が全体の約42%（過年度でも同じような数値）となっており、虐待リスクが高い。

- ・年長児の場合

① 市町村や関係者が家庭の支援・見守りをしてきたが、家庭のリスクが抑えられず、リスクが高くなり、社会的養護での支援の場合。

② 地域ですっと困り事はあったが、誰からも発見・頼ることもできず、年長児になって初めて児童相談所が関わって、社会的養護につながる場合。

→ ある日、突然、保護者とこどもの関係が悪くなり、家庭の困り事が大きくなったというよりも、子育ての初めの内から家庭ではいろんな心配事・困り事が発生している。早期発見が重要だが、問題が大きくなり、支援が届くのがいつなのか、そのときの家庭の状況、こどもの様子で、ファミリーホームで見るこどもたちのケア、サポートが大変になってくる、変わってくる。年長児のお子さんも「今、大変になった」というわけではなく、それよりももっと前から、保護者、こどもともに大変な状況があった。

こども虐待による死亡事例等の検証結果等について

- ・令和4年度：72件、3年度：74件、2年度：77件

こどもの数は激減しているが、死亡ケースは高止まりしている。

- ・検証結果からわかること

- 0歳児の割合：48.2%、0日児：17.7%

3歳以下の割合が76.0%を占めている。

- 主たる加害者の割合：実母が53.2%と最も多い。負担が強い。

- 妊娠期・周産期における問題、予期しない妊娠/計画していない妊娠が27.7%、妊婦健康診査未受診が27.3%

全体の傾向は変わっておらず、その傾向に対する対策を取っていく必要がある。しかし、守り切れていない現状がある。徹底したサポートをしていく必要がある。

- ・どのような支援が必要なのか

赤ちゃん、乳幼児を育てているお母さんのサポートを徹底していく。生まれてからではなく、妊娠段階からの支援が必要。児童福祉法で、妊娠段階から支援が必要な人、リスクが高い人、子育てが心配な人を「特定妊婦」と記載されている。生まれる前から子育てを支援していくことが非常に重要。

虐待を受けたこどもの状況

- ・令和5年度の児童相談所における虐待相談対応件数：225,509件

その内、4,524件の児童が施設等入所、約2%。

→ 支援を受けながら在宅で生活している保護者・児童の方が圧倒的に多い。

見守り・支援が届きにくくなり、リスクが高くなると一時保護・措置となる可能性がある。サポートを常に意識していくことが非常に大切。

- ・一時保護、こどもたちの声として

多くのこどもたちが一時保護のタイミングで苦しみを背負うことがある。

「一時保護を思い出したくない、ある日突然の出来事だった」と話すことが多い。

こどもの命を守る観点から児相も動いているが、こどもからしたらその瞬間、自分がずっと住んでいた家に帰れなくなり、お父さん、お母さんと一緒に過ごせなくなり、学校等へ通えなくなり、何処かわからない所へ連れていかれ、いつまでその生活が続くかもわからない、こども目線で見るとその状況になる。こどもにとっては大きな影響・体験になっていく。

→ 児童相談所としては、そのまま在宅で生活をしていると、命の危険が高い、動かざるを得ない・放っておくことができないことで、行政として一時保護をする。そのもっと前段階からこどもは苦しんでいる。一時保護のタイミングでもう一度苦しむことになる。

社会的養護のこどもたちと話すとき・・・「僕や私を救ってくれて今はいろんな人たちに心配してもらい、応援してもらい、生活ができているけど、本当はもうちょっと早く、私のお母さん、お父さんを救って欲しかった」と多くのこどもたちが話す。

それが社会的養護の入り口のところとなる。こどもは少ないけれども、支援が届いていない現状がそれを引き起こしている。

ファミリーホームの状況

・最新のデータから

全国でファミリーホームは487か所、1,810人のこどもたちが生活している。

被虐待児童：56.8% 障害がある児童：51.2%

→ その状況から個別対応職員加算につながっている。ファミリーホームの特徴として、小さいこどもも平均的には多いが、16歳、17歳が他の社会的養護よりも多く、しかも家庭からダイレクトに来る。

市町村の虐待相談対応

・平成16年の児童福祉法改正から市町村でも虐待相談対応をしている。しかし、市町村は一時保護・措置の権限を持っていない。

① 市町村は地域の関係機関、地域の人とこどもや家庭を見守っていく。そのチームを作る機能のことを「要保護児童対策地域協議会」と言い、市町村が真ん中に立って、組織を構成していく。

② 子育てサービス、一時預かり、ショートステイを実施して、お母さん、お子さんの日々のストレスを少しでも軽減していく。

市町村はその両輪で見えていただいている。

子育ての孤立化

・地域子育て支援拠点の利用者への調査から

「子育てで、つらいと感じることがあった」 62.6%

「家族以外の人と交流する機会があまりなかった」 57.2%

「子育ての悩みや不安を話せる人がほしかった」 55.4%

→ 子育てが孤立してしまっている。相談できる人と出会えていない、頼って良い場所が見つからない・近くにないことが子育てのストレスの増加につながっている。

子育て支援の利用状況、ショートステイとファミリーホーム

令和元年度の供給量は9万人日、要対協の名簿登録リスト約23万人、自治体が支援しているお子さんがショートステイを使う想定で計算すると、1年間で0.39日の提供ができるようになっている。1を下回っているので、宿泊ができず、1年に1回数時間だけ使える、リスクが高いお子さんですらそれだけしか使えない。

→ それでどのように地元の子育てを支えていくのか・・・供給量が足りていない。

虐待による死亡事例を調査しても、子育て短期支援事業の利用は0だった。

死亡事例が起きた自治体にショートステイの事業があるのかどうかを調査すると、86%の自治体で「ショートステイ事業はある」と回答があった。地元ではショートステイ事業は展開しているが、死亡事例のお子さんは1回もショートステイに辿り着くことができなかった。

→ もし、1回でもショートステイに辿り着くことができたなら異変に気づくことができたかもしれない。子育て支援事業の内、宿泊を伴うものはショートステイのみとなっている。市町村には「ショートステイを優先的に作って欲しい」ことを伝えている。そしてショートステイの担い手にファミリーホームがなっている。487か所の内130か所（令和6年度）となっている。

→ ファミリーホームの養育経験・ノウハウ、これまでの活動を活かした、地域で大変になる前のお子さんを救う役割を担っている。

まとめ

児童福祉法で「国及び地方公共団体は、児童が家庭において心身ともに健やかに養育されるよう、児童の保護者を支援しなければならない。」とされている。

①一番身近な市町村が子育て支援 → ②リスクが高まったときに児童相談所対応、市町村のバックアップ → ③ファミリーホームへの委託等

①、②のサポートが届かなかつたら、③となる。ファミリーホームへ委託されたこども、未来のこどもたちもすべて①、②を経ている。

・保護者、こどもの目線から

市町村の支援、児相の支援、ファミリーホームへの委託時、様々なフェーズで全部「知らない人」と初めて会うことになる。家庭で生活しているときに、ファミリーホームと交流する機会があれば、ショートステイの利用者であったなら、要対協のメンバーだったら、「知っている人」となり、安心材料となる。家庭へ帰ったとしても、関わる人が同じであることが何よりも安心となる。

ファミリーホームでは生活しているこどもとの愛着形成は重要だが、地域で生活しているお父さん、お母さん、世帯・地域との愛着形成も大事になる。大きな地域の中で同じ人がずっと見守ってくれることは、相談して良い場所・頼っても良い場所となる。

→ 子育て支援と社会的養護はわかれておらず、ずっと地続きでつながっている。

メンバーチェンジ、うまく引き継ぎ・バトンタッチができないと家庭の大きなリスク。

→ 目の前のお子さんを大事にしながら、少しでも上記の目線・俯瞰して見て欲しい。意識や姿勢を持ってもらうことだけでも非常に大事。

基調講演 「子どもたちの笑顔のために ～つながり、つなげる～」

社会福祉法人光明童園 理事長 社会的養育総合支援センター センター長 堀 浄信氏

社会的養育総合支援センター・・・制度上にはないが、社会的養育を頼りにしている子どもさんの支援をみんなでやっていこうと進めているもの。熊本県での取り組みとして、児童養護施設等の入所型施設はこれまでつながっていたが、ファミリーホーム、里親、自立援助ホームとはつながっておらず、熊本県社会的養育推進協議会を作り子どもを中心としてつながり活動している。

感じたことや思ったこと／たくさん話をする



発言したことが体験となり、知恵となって身につくと言われています。金八先生の言葉で「自信とは、自分のことを人に言うこと」というものがあります。ファミリーホームでも、なかなか自分のことを話すのが苦手なお子さんも多いですね。私の施設でも、緘黙症のお子さんでした。私が「～さんご飯おかわりをする？」と聞いても、ジーッと一点を見つめて答えてくれないんですね。特定の職員さんには話をしてくれていましたが、学校でも全然喋りませんでした。その子が高校の特別支援学級に入った途端によく喋るようになって、人前でダンスをするようになりました。おそらく、その子のなかで、しっかりと聴いてくれる人、そのまますを受け入れてくれる人がいて、自信が高まって、喋るようになったんだと思います。

自分のことを話すことは脳にもとても良い影響があると言われています。例えば、美味しいものを食べたり、大好きな人とデートをしたり、旅行をするのと同じような影響があると言われています。今、話を聞いてもらっています。インプットしてもらっています。聞いたことをアウトプットしないとなかなか身につきません。一番効果的な学習は3（インプット）対7（アウトプット）と言われています。

意図的な感情表出

「話をしてくれてありがとう」という実際のケース紹介。実家庭へ外泊の予定をしていましたが、体調不良で中止になりました。夜、とても辛そうな表情で泣き出しました。「ママと一緒に出かけをしたかった」、辛い気持ちを子どもの言葉で話をして

くれました。職員から「話をしてくれてありがとう」、「言葉で伝えられて偉いね」と褒めました。「行けなくて辛いよね」、「ママもお出かけをすることを楽しみにしていたと思うよ」と伝えると、静かにうなずいて安心した表情で眠りにつきました。辛くてどうしようもない事実是不変わります。でも辛かった気持ちは減らすことはできました。思いを話してくれたことに、まずは「ありがとう」と伝え、褒めて、その思いをそのまま寄り添い、わかろうとすることが大切というケースです。現状は変わらなくても、聴いてくれる人がいたら安心につながっているということだろうと思います。

バイステックが「意図的な感情表出」と言っています。これはできるだけ子どもさん、保護者の方、感情をできるだけ出させてあげましょうというふうに教えてくれています。具体的には、伝える力も大事ですが、それよりも大事なのは「聴く力」だなと思います。私もいっぱい失敗しました。ついつい子どもの話を聴きながら「ああ、わかる、わかる先生も中学校の頃そんなこと思ったことあるよ」と言ってしまうんですけど、これはあまり使わない方がよいなと思っています。

コミュニケーションはずれますので、本当にしんどい思い、辛い思いをして、虐待を受けたようなどどうしようもない思いをしている子どもに「わかる、わかる」ということは失礼だと思うんです。でも、「知ろう、わかろう」とすることはできると思うんですね。知ろう、わかろうとする姿こそ、子どもたちは求めているのかなと思ってたりします。体は食べた物で作られて、心は聴いた言葉で作られます。未来は話した言葉で作られます。みなさんもいろんな思いがあると思いますので、たくさん話をしてください。

子ども・子育て事情

現代社会における家族について、子ども・子育て事情、例えば虐待という言葉が先程の胡内さんの話しからもありました。他にどんなキーワードが思い浮かびますか。こんな言葉が思い浮かびます。貧困ですね。7人に1人は貧困の状況とか言われています。貧乏とは違うと言われています。第二次世界大戦の後、児童養護施設は始まっていますが、その当時は貧乏と言われていました。物やお金はないけれど、同じ方向を向いている、つながっていたとは言われています。後は、不登校、いじめ、自死、人口減少。人口減少は先程胡内さんも言われたように本当に衝撃を受けています。今、1年間に小中高生529名が自ら命を絶っています。こんな国は日本しかないそうです。おそらく、「迷惑をかけてはいけない」と小さなころから教えられた子どもたちが、「人に迷惑をかけるぐらいなら・・・自分がいなくなった方がよい」と思って、自

ら命を絶っているのではないかなと思っていたりします。「子どもの笑い声が聞こえない街は滅びる・・・」これはギリシャの昔からあることわざですが、もう日本は滅びるのではないかと言われていたりしますね。

子ども・子育て事情・歴史的には

歴史的なところにも触れておきたいなと思います。江戸時代はどうだったのか、実は江戸時代は、世界の中で日本が一番子どもに優しい国と言われていました。士農工商制度、お侍さんの家庭に生まれた子どもはお侍さん、農家に生まれた子どもは農家で働くということが生まれながらに決まっていました。でも、社会全体で貧困で、ひもじい家庭で生まれた子どもさんは誰かが代わりに育ててくれているという状況があったんですね。我が子を世間に託す道がありました。それが大きく変わったのは明治維新なんですね。明治維新によって士農工商制度が廃止されて、子どもの将来は個人・家庭の観点で築かれるようになりました。社会の公共的な営みが、親の私的な営みへと変換されました。これが今の子育ての孤立化を生んでいると言われていています。

視点を变えて、いろんな事件がニュース等で行われていると思いますが、家庭内で親が子どもを殺したり、子どもが親を殺したり、また少年による殺人加害、よく聞かれると思います。1979年、高度経済成長期、家庭内殺人は300件、2000年は150件、減っているんです。少年による殺人加害、1965年、400件、2000年、100件なんです。みなさん、スマホとかニュースですぐに情報が入って、「けしからん、今の子は!」、「今の若いもんたちは怖い、すぐにキレて人を殺してしまうんじゃないか」って聞こえてきますが、今の子どもたち本当によく頑張っていると思います。みなさんも情報過多にならないように、その子とどう向き合うのかを大事にしてもらえたら良いかなと思います。

キラキラネーム流行っていますけど、キラキラネームは笑い話になることも多いですが、実は社会の状況を表しているとも言われています。名前って言うのは、家をつなぐ、「あそこの長男さんやね」とか「あの家の次男さんやね」とかって、お互いの家と家をつなぐコードでした。でもキラキラネームが流行っているということは、自由度は高まっていますが、それだけ家の中だけ、「自分の子どもは自分が読めたらそれで良い」、社会とのつながりが希薄化していることを表しているとも言われています。

母性神話

母性について触れたいと思います。妊娠・出産すると、お母さんに次第に母性が生

まれるという母性神話、日本に根強いですね。お母さんは、子どものことを第一に考えるべきだ、それが当たり前なんだ、という学説。この母性神話がお母さんたちを苦しめていると言われています。これ実は科学的に間違いであることが証明されました。

女性には、エストロゲンという女性ホルモンがあります。エストロゲンは妊娠すると、出産直前まで上がりますが、出産をした途端にゼロに近い状態になります。エストロゲンが減少することで、わざとお母さんに「不安や孤独を感じさせる」ように遺伝子上組み込まれました。なぜか？これは人類が進化するために理由があるそうです。不安や孤独だからこそ、誰かに預けられるようになった。共同養育の観点から、誰かに我が子を託すことができるんですね。なので、人間は、誰も助けてくれずに、一人っきりで子育てはできないものなんです。そもそも、できるように作られてはいません。だからこそ、昔は核家族じゃなくて、三世代同居とか地域の方とつながりが深く、いろんな人と協力して子育てをしていました。

社会全体で子どもを育む観点から、この世の中、核家族を三世代同居にはできませんので、だからこそ社会全体で子どもを育む「システム」が求められているという構図なんですね。そういった面をこども家庭庁が言って、やってもらっているということなんですね。家族依存、「子育ては親が行うべき」、「全責任は親なんだ」という根深く蔓延っている価値観を変えないと、子どもの幸せ、子どもの笑顔は担保できないということなんです。フランスでは、連帯という意味で、ショッピングセンターで赤ちゃんを抱えて、荷物を抱えているお母さんがいらっしゃったら、パーっと手伝ってサーっと去っていく。それが当たり前にするみたいなんですね。児童虐待という言葉も使っていないみたいです。「心配」、制度が届いていない家庭が、結果的として虐待になってしまう、社会の責任だというふうになっています。

強い紐帯、弱い紐帯

貧困は決して自分に関係のない問題ではなく、すぐ隣にあるものだと言われています。そういった意味で、経済的貧困は、「つながりの貧困」とも言われています。ただでさえ、つながりがなくなっていたのが、コロナによってソーシャルディスタンスという名のもとに、「関わるな、接するな、近づくな」と言って、もっともつつながりが希薄化されていっています。そこで、マーク・グラノヴェッターの「弱い紐帯の強み」を紹介していきたいと思います。

紐帯は紐ということです。新規性の高い情報は、自分の家族や親友、職場の仲間と

いった社会的つながりが強い人（強い紐帯）よりも、知り合いの知り合い、ちょっとした知り合い、社会的なつながりが弱い人（弱い紐帯）からもたらされる可能性が高い。わかりにくいので、詳しく言うと、強い紐帯は、お父さん、お母さんとか学校の先生、「この人にこう言ったら怒られるかもしれないな」と気を遣いながら子どもが接している人が強い紐帯だと思ってください。逆に弱い紐帯はどちらかと言うと、みなさんの立場かもしれません。「この人には何を言っても大丈夫かな」とあまり気を遣わずに喋れる人が子どもたちには大事なんだということです。お互いに気楽に話せる人、そういった人ばかりではダメなんですけど、強い紐帯もありながら、弱い紐帯がたくさん、弱いつながりの人がたくさんいることが大事だということです。強い紐帯の関係性だけでは自立は危うく、意思表示、いろんな話が「このことはこの人に話をしよう」とか、そういうつながり、弱い紐帯が意思表示を促進し、強い紐帯にも影響を与えるということなんですね。

強い紐帯、弱い紐帯 始援／支援

私、保護司をしているんですが、法務省が何年か前に調査をした結果、どんな人が犯罪を起こしにくいのか分かりました。それは小さな頃から、お爺ちゃん、お祖母ちゃん、地域の人、いろんな人の価値観に揉まれながら成長してきた子ども・大人は犯罪を起こしにくいそうなんです。それは、いろんな人に関わるので、「人ってこういう変な人もいるんだ」みたいな感じで、許容範囲が広がっているのだろうなと思います。また、「これをしたらあの人が悲しむかもしれない」という、許され型罪悪感が構築されているのだろうなと思います。今、よく言われている第三の居場所。お父さん、お母さん、学校でもない、子どもが何でも気兼ねなく話ができる場所が大事と言われています。

先程の話の流れで言うと、支援をするには、「縁」がないと無理なんですね。初めて会う人に「助けて！」とは言えないですね。日頃から関わりがあるからこそ、「しんどいな、苦しいな」と思ったら「あっ！あの人に相談しよう」につながると思います。そういった意味では、困ってからでは遅いということで、ショートステイとかいろいろな取り組みの中で顔を合わせる関係性を少しずつ、緩い紐帯の強みを発揮していることが社会の中で求められているのだろうなと思います。アフリカのことわざを紹介します。「1人の子どもを育てるためには、村中の大人の知恵と愛と良い環境が必要だ」と言われています。フランスでは、ソリダリエ「連帯」、正に今大会の「つなぐ、つなげる、つながる」ということなんだと思います。

写真で見る大会の様子



第1 分科会

第2 分科会



第3 分科会



閉会式
実行委員会のみなさん大会運営 お疲れ様でした！！

こどもまんなか委員会

REPORT



ファミリーホーム協議会 長崎大会

長崎県で開催された FH 全国大会において、「こどもまんなか委員会」の活動を報告します。私たちは、1. こどもまんなか休憩室の運営と、2.1 日目の懇親会の時間を利用して子どもたちに「アドボケイト」の認識調査を行いました。

1. こどもまんなか休憩室

会場内の一室をお借りし、自由散策をしている中高生のみなさんが、「ちょっと休みたいな〜」「一息つきたいな」と思ったときに、気軽に立ち寄れる「こどもまんなか休憩室」を設けました。室内には、ドリンクやお菓子、ボードゲームを用意し、あくまで「自由に使える場所」として運営しました。ふらっと立ち寄れて、子どもたちが安心して自分のペースで過ごせるような空間づくりを心がけました。



2. 「アドボケイト」認識調査

こどもまんなか休憩室を使用してくれた子どもたちや、懇親会に参加してくれた子どもたちを対象に、「アドボケイト」に関する認識調査を行いました。「子どもアドボケイトって知ってる？聞いたことある？」という質問に、シールを貼って答えてもらう形式で行いました（右の写真参照）。この結果をうけて、委員会としても今後の活動を検討していきたいと思います。今回、協力してくれた子どもたちに、心より感謝申し上げます。

当日お手伝いをしてくれた
ユースの声



この認識調査を実施にあたって、FH で生活するユースが協力してくれました！調査を終えて、メッセージをよせてくれたので、ここでユースの声をご紹介します。

やっぱり施設の職員さんや、里親さんは「教えたのに！」だったり、「家に本あるのに」など言っていたけど、これだけ多い数の子どもたちがいてアドボケイトのことを知っているのは数人しかいないことを考えるとまだまだ、子どもたちが知れる環境が整っていないと思いました。また、子どもたちが当たり前のようにアドボケイトを知れるし使える環境にして欲しいなと思いました。（たいし）



第1分科会 『ファミリーホームに期待されること』 ～関係機関との連携～

社会的養育総合支援センター センター長 堀 浄信氏
助言者：こども家庭庁 家庭福祉課 課長補佐 胡内敦司氏

今日の目当て

- ① 参加者同士で仲良くなる
- ② より良い会議/グループワーク
ファミリーホームでチームとして、組織として動く
- ③ 関係機関との連携
- ④ 明日のために

グループワークのルール

- ・ トーキングピースを持っている人が安心して発言ができる。
- ・ 発言しない権利がある。
- ・ 誰かが発言したら拍手をする。
- ・ フランスの哲学者ヴォルテールの言葉
「私はあなたの意見には反対だ だがあなたがそれを主張する権利は 命をかけて守る」

会話と対話、議論の違い

- ・ 共通項目を見つけ安心感を得る。 → 会話
- ・ 関係機関、個別対応職員で職員が増えてくる、組織として重要なこと → 対話
「違いを顕在させながら新しい意味/価値を作り出す」
お互い人間が価値観が同じことはあり得ないので、お互いの価値観の違いを確認しながら、新しい意味・価値を作りだしていくことが目的・上位概念。
- ・ 議論・・・まとめるためにあるのではなくお互いの違いを確認するためにある。
いろんな話ができる・何でも喋って大丈夫「心理的安全性」がないと良い議論は行われない。
→ 会議がうまくいっていない組織は、組織自体がうまくいかない。
逆に会議がうまくいっているところは、組織がうまくいっている。
- ・ 合議＝根拠を積み重ねること・・・いろんな人の価値観を出し合って、説明ができるようにしていく、合議を得る。

ブレインストーミング

合議を得るための便利な手法として「ブレインストーミング」がある。

・ブレインストーミングの4原則

1. 批判厳禁：その場で良い悪いの判断や批判をしない。
2. 自由奔放：制約なしに自由奔放に発想し、意見を述べる。
3. 多数歓迎：アイデアの量が多い方がよい。
4. 便乗発展：他人のアイデアを参考に連想発想を促進する。

4つの約束とルールにより、選択肢や方法を多く出す。その中から、メリット・デメリットを整理したうえで、現時点でのより良い（ベターな）選択を促す。自由な発想と楽しくいろんな意見をたくさん引き出すこと、違いが認め合える組織、チームが重要。

子育てに正解はない/正解を手放す

子どもを中心として、その支援をより良くするためにそれぞれの価値を出し合って、聴く耳を持ちながら検討することが大事。改めて、会話ではなく、対話が大事になる。

関係機関との連携、グループワークを中心として

・グループワークの様子

良いところをたくさんあげてグループの目の前の人を笑顔で褒める・伝える。

→ 大人になるとなかなか言葉に出して褒められることが少なくなるので、「嬉しい」ということを体験してもらうためにグループワークを行う。

人の悪いところは目につくが、良いところは探す、訓練が必要。

→ 堀先生の施設の職員さんでも、子どもたちから言葉の暴力を受けると、自己肯定感が下がる。そのようなときに職員会議でお互いの良いところを伝えあうことを行い、自己肯定感を高める。

・関係機関とうまくいっていること、うまくいっていないことを考える（個人ワーク）

→ 「こうだったら良いな」、「こんなことができたら良いな」を主語を「私」にして、グループでアウトプットする（グループワーク）。

→ グループからの発表

① 全部の都道府県ではないけれども支援計画を関係機関が立てている所もある。それをファミリーホームがきちんとしていくことが大事なこと。

- ② 常日頃から関係機関との関係作り。フットワークを軽くして、人間関係を作っていくことが大事。
- ③ ファミリーホーム、里親同士のネットワークがたくさんあったら良いな。
- ④ 実親の支援も必要。
- ⑤ 行政、児相の方について、「ずっと変わらない方が良いかな」という意見があった。里子や里親さんが信頼感を持つことができる。「行政の人がもっとしっかり関わってくれたらありがたいね」という話もあった。

胡内さんからの助言

今、「良いね」と言っていたことが、どうやったら実現できるのか、あるいはちょっとそこに近づくことができるのか、行政との関係も諦めずにアプローチしていく。養育者としての声・ニーズを一緒に受け止めていく関係機関や児相が増えていく欲しい。増えるだけでなく、ちゃんと里親さんや養育者の気持ちを受け止めながら一緒に動いていただく、里親支援センターの質という意味での仕組み作りをしていくことを考えたい。

自分が「こうなったら良いな」ということを誰かに言ってみる・誰かと一緒に動く、子どもたちのために・地域のために、一歩踏み出すのが難しかったら、半歩踏み出す。半歩が難しければ前のめりになってみる、自分ができそうなことにチャレンジしてもらいたいなと思いました。私も自分ができるところから、チャレンジしていこうと思っています。

つながり/明日のために

市町村・要対協との関わりが重要視されているところです。地域の中で、どう子どもたちを中心として支援をするのか。よく言われるのは、施設とかに来る子どもさんたちは3つの大事な要件から引き離されると言われています。①家庭・家族、②学校、③地域、この3つから引き離される。ファミリーホームのみなさんが、地域の中に根付かれていらっしゃるということで、施設も含めて、いろんなところと子どもを中心として連携をして、子どもがどうやったら安心するのかを模索していく。先程の胡内さんがおっしゃったように、「誰かに言ってみる」、「誰かに聴いてもらう」が最初のステップかなと思うので、整理をしながら、変わっていった、できることから行政や関係機関に伝えていってもらえたらなと思います。

第2分科会 『ファミリーホームのこれからの役割』

ワンズハウス養育者 NPO法人ワンズプレイス理事長
日本ファミリーホーム協議会事務局長 小松拓海氏

自己紹介

専門学校卒業後、障害者支援施設に就職。その後、乳児院へ転職し、「もっと良い赤ちゃんが過ごす場所が必要」と思い、養育里親となる。半年後、里子の委託があり、実子と共に養育をする。その後、出会いがあり、児童養護施設へ転職する。自身が33歳のときに、神戸市で初めてのファミリーホームを開設し、今年で12年となる。現在までに38名（一時保護含む）のこどもの受け入れ、ショートステイの受け入れも月に2～3件ある。2017年に一般社団法人日本ファミリーホーム協議会の事務局長を務める。



ワンズハウスでの関わり

- ・1人1人に合った関わりを目指して

施設職員時代、小学生・中学生・高校生に対して、スマホが持てる時期、門限、就寝時間が決められており、1人1人、趣味、生活スタイルが違うので、いろいろと話をしながら、力量を見ながら柔軟に対応、生活のルールを作る。

- ・こどもに責任を持って継続的に関われる

施設職員時代、こどもに問題があっても家に帰らないといけなく、その日のうちに対応をする必要があり、適当になることがあった。ファミリーホームでは共に生活しているので、年単位の時間をかけてしっかりと関わって、成長を見ていくことができる。

- ・自立

進学、就職、ファミリーホームから巣立ったときが自立ではない。こどもたちが連絡してくる、支援を求める限りは一緒に住んでいなくとも、心のつながりを大切に継続して関わる責任がある、と思っている。こども自身が自分の足で自分の生活を歩んでいける 때가自立だと思っている。

NPO法人ワンズプレイスの活動

神戸市の制度でリフレッシュステイ（ショートステイ）があり、こどもを受け入れていますが、事前準備等利用のハードルが高く、親御さんにとってもっと使いやすいサービスがないかと思い、2019年にNPO法人を作り、「地域とつながる、支援をしたい」と思い、サービスを作り出すことにしました。地域の中で、こども同士、親同士をつなげて、みんなが楽しく過ごせる地域作りを目指しています。NPO法人ワンズプレイスの存在意義として、まずは来てもらい、ワンズプレイス、ファミリーホームを知ってもらうことを主な目的としています。

・ワンズプレイスのメニュー

- ①ワンズタイム・・・1時間500円で、いつでもこどもを預かる。LINE対応。
→活動が6年目となり、Instagram、HPを見ての利用者が増えている。
- ②ワンズシェア・・・地域の方に不要になった物を寄付してもらい、必要な家庭に無料でお渡しする。
→入学式のスーツ、発表会のドレス等、1回のために購入するのがもったいないときに利用していただいている。
- ③ワンズスポーツ・・・脳のトレーニング、サッカーを教えることを庭でしている。
- ④ワンズカーニバル・・・お祭り、もちつき大会、運動会等を開催。
- ⑤ワンズサークル・・・未就学児のお母さん、こどもに対して、看護師さん、助産師さんがスタッフに居るので、食育、発達の相談、親同士のつながりを作る貴重な集まり。
- ⑥駄菓子屋ワンズ・・・駄菓子屋をやりたいと思い、始めたところ大盛況。
- ⑦ワンズ広場・・・放課後支援。
- ⑧ワンズ食堂・・・こども食堂。

・NPO法人ワンズプレイスをしているなかで気づいたこと

- ①リスク0 ワンズプレイスに遊びに来る。（表面上のリスク0）
- ②リスク1 サービスの利用 → 少しこどもと離れたいのかな？お母さん1人では抱えきれない仕事、子育てがあるのかな？と思う。
- ③リスク2 ワンズタイムの利用が頻繁になったり、利用時間が伸びてくると、リフレッシュステイの紹介。リフレッシュステイの負担金、ワンズタイムの負担金の比較・説明、気にかけて関わりを行う。丁寧に説明をする。リフレッシュステイの利用につながると行政にも情報が入り、支援ネットワークの構築につながる。

④リスク3 ファミリーホームでの一時保護、児童相談所が関わる。

⑤リスク4 ファミリーホームへの委託。

→リスク3からの支援ではなく、リスク0での「寄り添い」からのスタートを目指している。自分達も子育てをしているので、同じ立場のときから関わりたいと思っている。「支援者」よりも「一緒に生きている立ち位置」、順調なときから関わりたい。親子分離、ファミリーホームへの委託となったとしても、児相と、家庭再統合に向けて面会・外出・外泊等、交流を進めて家庭復帰を目指す。家庭復帰がゴールではなく、その後もしんどくなったらワンズタイム、リフレッシュステイを利用し、いつも同じ場所で同じ人が居ることが親御さんの負担感を減らすと思い、活動をしている。

個人的なファミリーホームのこれからの役割として

- ・地域の何でも屋さんを目指している。
- ・里親、ファミリーホーム、施設、こどものケアニーズに合った措置先の決定、ケース会議の場が必要。家庭養護が合わないお子さんも居るので、お互いに傷つき体験をしないような場が全国各地にできれば。
- ・こどもの意見も聞かずに措置変更がされる。「困っていることはないですか？」と聞かれ、委託児童のことを相談すると措置変更された経験もある。児童相談所や行政に対して、エビデンスをもとに話し合えるように情報収集、記録を持って、こどもたちの思い、自分達の思いを伝える技術が必要。
- ・4月から「小1の壁」に対応するために神戸市が早朝受入事業をスタートさせたので、ワンズプレイスで手をあげて認めていただく。
→学校がある日、月～金、7時30分に小学校の図書室へ行き、こどもたちが来るのを待っている。毎日、15～20名程度のこどもが利用。ワンズプレイスが中心となり、地域の団体、地域のみなさんと共にシフトを組んで対応している。
- ・神戸市、2026年の夏で中学校の部活が廃止になるので受け皿として、「KOBE◆KATSU」（サッカー部）に手をあげると認可され開始予定。
→今までの活動実績を活用し国の制度ができるよう行政に働きかける。国の制度を利用することで、働き手の確保や、関わりのあった保護者やファミリーホームを巣立った子、地域の保護者と共に、地域福祉の担い手を増やしていきたい。

○多機能型ファミリーホーム

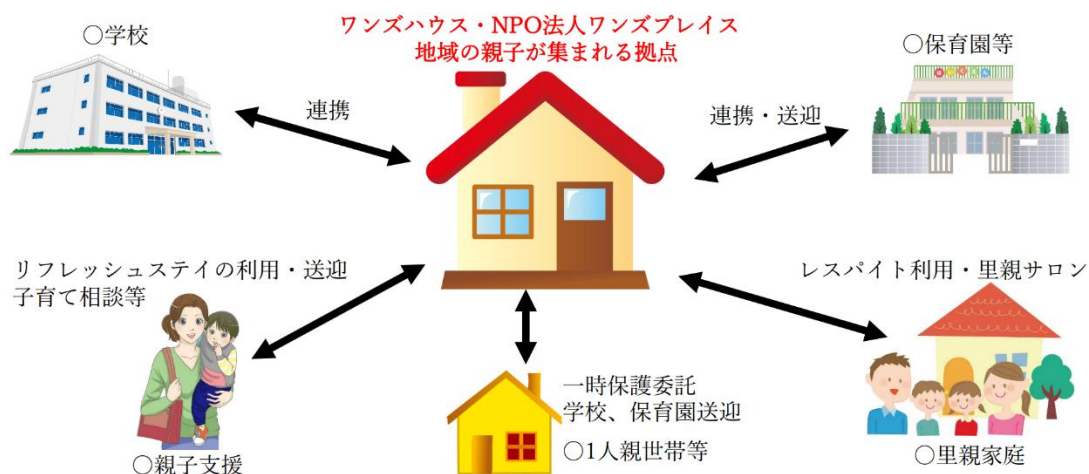
全国のファミリーホーム、1ホームずつ特色、目指すものがあり、いつまでも1つの制度で括っていると発展が難しい。多機能型ファミリーホームを枝分かれして、地域の拠点となるファミリーホームができたらと思っている。

多機能型

ファミリーホーム

ファミリーホームやNPO法人が拠点となり、

- ①ワンズタイム、ワンズカーニバル、ワンズサークル等で地域交流。
- ②一時保護やリフレッシュステイ、レスパイトの受け入れで、地域支援。
- ③駄菓子屋ワンズ・ワンズ食堂で、子どもの居場所作り



質疑応答

・ショートステイの受け入れ、定員内になるかと思いますが、神戸市での対応はいかがでしょうか。

A：神戸市では児童養護施設等は定員外の受け入れの申請方法があったようで、ファミリーホームにも拡充していただき、定員外の受け入れ希望書を提出すると、プラス2名、8名までの受け入れが可能となっています。泊まれる部屋、職員登録を文書でしています。

・ワンズタイムの活動、どこかに届け出を出しているのか、手続きはあるのかどうか。

A：独自にやっています。NPO法人で活動をしているので、賠償責任保険に加入しています。何かあったときは保険でカバーをしていくことをしています。行政によってはファミリーホームで不必要にこどもを預かっていると難色を示すところもあると思いますので、NPOでしているのと、建物をわけて別の事業でしています。

第3分科会 『子どもたちの支援について』 ～子ども達が大切にされていると感じる支援について～

コーディネーター 児童家庭支援センター絆センター長 荒木康生氏
助言者：こども家庭庁 家庭福祉課 課長補佐 入澤 優氏

【分科会趣旨】

社会的養護の子どもたちの現状として、6割近い子どもが被虐待児である。被虐待児でなくても、家庭の問題で、心のケアが必要な子どもが多い状況である。本分科会では、子どもたちの自己肯定感を高め、自分に自信が持てるような支援を研究する。



1. 児童養護施設聖華園での取り組み 荒木康生氏

児童家庭支援センター絆は、児童養護施設聖華園に併設されており、私は児童家庭支援センター絆のセンター長と聖華園の職員(指導部長)を兼任しています。将来的に聖華園の措置児童の施設は全部外に出して本園は全部地域支援に使っていきたいと思っています。ショートステイ、児童育成拠点事業、放デイ+入浴付き、食事付き、送迎付きでやりたいと思っています。聖華園を家庭に近づけるためにかなり改革をしました。現在は、本園4ホーム、分園2ホームオール個室で、職員体制も夜は2人体制で手厚くしています。特にすべてのホームで買い物からメニュー決めまでの全調理を実施。クリスマス会などの全体行事をなくし、お誕生日当日にお祝い会をするなど、ホームごとに行事を増やすようにしました。子どもたちの家庭のモデルになるようにと思っています。

そして、子どもたちが大切にされていると感じる支援を大切にしています。

2. 子どもたちが大切にされていると感じる支援について

こども家庭庁の調査でも、児童の被虐待経験の割合、障がいのある児童の割合、学業に遅れがある児童の割合ともに、ファミリーホームは大変比率が高いです。社会的養護の子どもたちは、家庭で大切に養育されていない子どもが多く、その結果、反応性愛着障がいの子が多くなっています。自分や他者を大切にできず、トラブルも多いです。家庭でほめられた経験がなく、自己肯定感が低いです。そういう子どもたちが大人になって家庭を持ったときに、自分の子どもが大切にできず、虐待の連鎖が

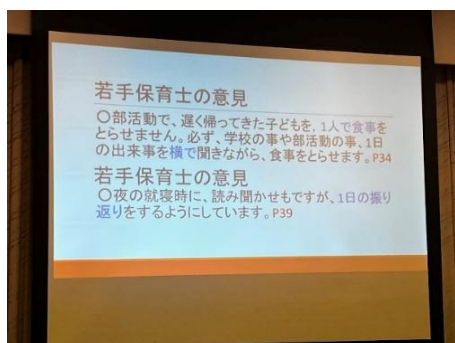
起きます。悲しいことに私が担当した子どもたちが、子どもを連れてくるんです。とても悲しい思いをしました。佐賀県は、家庭で子どもを育てることを優先し、どんどん里親に委託することを推進しています。

子ども達が大切にされていると感じる支援について、私は、「子ども達」と考えていて、1人が大切にされている支援を見たり感じたりすることで、ホーム全員の気持ちが温かくなるような支援をしたいと思っています。そして、養育者の自己満足ではなく、子ども達自身が大切にされていると感じることが大切だと思っています。

それに関して、本日資料を用意しましたように、施設で子ども達が大切にされていると感じたときなど、良い取り組みを園内 SNS に書いて、全職員で共有しています。

○ 毎日登校時に玄関まで見送っている職員がいます。「行ってらっしゃい。テストががんばってね」と声をかけて見送ると、この子どもはとてもやんちゃな子ですが、とてもてれくさそうにしていました。いいなあと思いました。行ってらっしゃいだけじゃなくて、必ず一言付け加えるそうです。とても良い取り組みだと思います。

○ ある男性職員は、アイロンをきちんとかけたシャツで学校に登校してもらえよう、カッターシャツにアイロンをかけています。施設に来るまで、洗濯もしてもらえず、汚れてしわのままのカッターシャツで登校していた子どもも多いので、アイロンをかけたカッターシャツで毎日学校に行かせることで、子どもたちが親になったときに、カッターシャツにアイロンをかけることを知っていると、ネグレクトも減るのではないかと思い、取り組んでいるそうです。それを知った他のホームの職員もみんな真似をするようになりました。



○ 高校生が部活で遅くなり夕食を一人で取るときには、必ず職員も一緒に食卓につくようにしています。テレビも一緒に見たりして、コミュニケーションをとるようにしています。高校生はスマホを持っているので、部屋にいる時間も長く、日ごろ小学生に手をとられることも多いので、高校生との時間を大切にしています。

○ ねかしつけのときに子どもと一日の振り返りをするようにしています。日ごろ言えないことが言えたり、職員と一对一の時間をとることで、自分が大切にされていると感じると思います。

○ 子どもたちのアルバム「育てノート」を作っています。写真だけでなく、一言メッセージを書き添えています。

これらは、私が子ども達が大切にされているなあと思ったことですが、これからはみなさんが、子ども達が大切にされていると感じる支援について、各グループで出し合って、その中で代表する支援を選んで用意された用紙に書いて、後で発表してもらいたいと思います。

3. 各グループの発表

A 個別の支援を意識する

荒木先生の話聞いて、施設とF Hは違うと感じたが、やることは同じかと思った。

B お弁当メニューを毎日変える。イベントごとに家族写真とケーキ。子どもごとのアルバム作り 寝る前の読み聞かせ、振り返り。

C 一人一人の「好み」を大切にし、お出かけ、部屋のインテリア（ベッド・壁紙など）を選んでもらう。一人一人の声を大切にひろっていく。

児相に対してなど、子どもの代弁、子どもの声を届けることができるように。

D 小さいときの写真をみんなで見て話をする（大きくなった、かわいくなった、おもしろかったなど）

E ほめる回数を増やす（オットセイ理論） 正しく叱る（＝教えること）

叱ることも大切にされているということにつながりますね（荒木）

F 子どもたちに教えてもらう機会を持つことで、大人と子どもがよりコミュニケーションをとる時間が取れる。

携帯の使い方など、子どもから教えてもらうことで、お互いにわかりあえたりすることにつながるように思います。

G その子が望んでいる事を一对一でやる事が大切。

H 大人になったときに大切にされていたと感じる子育て

掃除の仕方をときには厳しく、また、工夫してできるようにしたことで、大人になったときに、大切に育ててもらったんだなあ実感したと、自立した子どもから言われた。

I 荒れた時のくどき文句

言葉にする。ということ。安定した生活をつないでいくことで大切にされていると感じると



思うが、子どもが荒れたときに、「ここに居なさい。大切に育てるから」と伝えた。

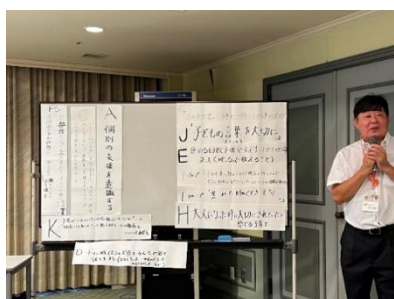
J 子どもの言葉（こころ）を大切に

子どもたちがどうしたいのか？ということをよく聞いて、子ども自身がどうしたいかを考えられるようにしていくことを大切にしている。

K 子どもがいらついていたら「困っていることない？」また「さみしいことないか？」と聞いてあげる。心の根底をつついてあげる。

物などに頼ることではなく、問題を起こすこどもの根底にある心の問題にアプローチすることを大切にしたい。

4. まとめ 荒木康生氏

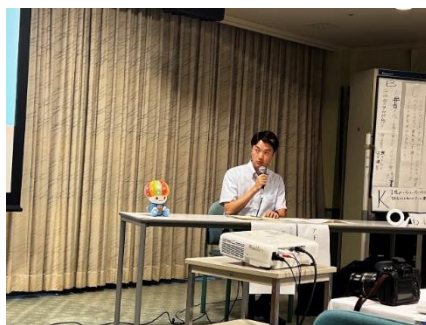


みなさんの発表を聞いて、ファミリーホームの方は、施設よりも、もっと子どもが大切にされていると感じることをされているなあと感じました。子どもが大切にされていると感じるとどうなるかということですが、まず、自己肯定感が高まり、自分もお友達も大切にできる。そして、自分に子どもが出来たときに、子どもを大切に出来る。家庭のモデルが出来ると。そして虐待の連鎖がおこらない。モデルがあるということがとても大切だと思います。

私は40人いる職員に、一人一つでも子どもが大切だと感じる支援が出来れば、日本一の施設になれるよ。と言っています。

5. 講評 入澤 優氏

発表を聞いていまして、どれもなるほどなと思いましたし、どれが正解というのもないと思いますが、みなさん共通して、子どものそれぞれの状況に応じて柔軟に引き出しを開けていけるような支援が大切なのだなと思いました。それぞれの FH がスーパーマンというわけにはいかないと思いますので、地域のつながりの中でいろんな人がアイデアを出し合って、チームとして、個々の子ども達の状況に合わせた支援をしていくことが必要だと思います。みなさんが取り組まれる中で、制度的にあると良いなと思われるものに関して私共も取り組んでいけたらと思っています。



閉会式

閉会式では、実行委員会を代表して長崎県ファミリーホーム協議会、進健一郎会長、協議会北川会長からお礼の言葉があり、大盛況のうちに全日程が終了いたしました。



次年度開催地 東京

第20回記念大会を開催

第20回を記念しての大会なので、これまでのような基調講演、分科会の形ではなく、記念式典・懇親会をする予定。

日程：令和8年8月3日（月）午後から開催予定

会場：帝国ホテル東京



ファミリーホーム通信 2025 年 11月

発行 日本ファミリーホーム協議会

編集 日本ファミリーホーム協議会 広報委員会